

ローマ人への手紙入門

著者及び年代

多くの学者は、パウロが紀元 57 年にコリントに滞在中、ローマの信徒たちに向けてこの手紙を書いたと考えています。また、パウロが 16 章で話すフィベという女性に手紙を託し、彼女がローマへ運んだとする見解もあります。

1 章 11-12 節で、パウロはローマの信徒たちを訪ねたいという願いを語っています。使徒の働きの後半部には、パウロが 3 年後にようやくローマへ至るまでの壮絶な経緯が記されています。パウロは逮捕され、投獄され、暗殺の標的となり、難破し、その他にも過酷な体験を経て、ついにローマに到達したのです。

パウロがローマの信徒たちに宛てた手紙は、世界に計り知れない影響を与えました。この手紙によって変えられた人々の歴史的事例がいくつか存在します。マルティン・ルターはその一例です。彼はパウロの言葉をどう受け止めたかのように記しています。「神の御霊によって私の言葉の意味を理解した時、一罪人の義認が主の自由な恵みによって信仰を通して成し遂げられることを知った時…私はまるで新しく生まれ変わったかのように感じた。」

義認とは、私たちの行いによってではなく、神の前で義と宣言されることを意味します。私たちは「信仰による主の恵み」を通して義と認められるのです。私たちは単に罪を赦されるだけでなく、キリストを信じる時、キリストの義を受け取るのです。この偉大な真理は私たちの信仰の基盤です。私たちは、キリストが十字架で成し遂げてくださったことを信じることで、救われ、義とされ、神の前で義と宣言されるのです。これはただ驚くべき恵みです。そしてこれが、パウロが教える私たちと神との関係の基盤なのです。

パウロはかつてタルソのサウロとして知られていましたが、後にローマ名であるパウロを名乗りました。イエスに出会う前、パウロはパリサイ人でした。彼はユダヤの律法と伝統を守ることに熱心すぎて、教会を迫害し、多くの信者を投獄しました。ダマスコへの道でイエスがパウロに現れ、御自分のしもべとなるよう召されたのです。イエスはパウロを異邦人のための使徒と任命されました。使徒とは王に遣わされ、王に代わって語る権威を持つ者です。

パウロはローマを訪れたことはありませんでした。しかし、そこに信者の共同体が築かれていることを知り、彼らを訪ねたいと願っていました。自分が訪れることを知らせ、イエス・キリストの福音を伝えることを望んでいたのです。ローマ人への手紙 16 章で、パウロはローマに住む知人 39 名を挙げています。つまり、手紙を書いた時点では訪問していなかったものの、彼にはローマに多くの友人がいたのです。

目的

ローマの教会に属する信者たちは主に「異邦人」（非ユダヤ人を指す）でしたが、ユダヤ人の信者もいました。彼らはイエス・キリストに生涯を捧げ、主への信仰を喜びとしていました。しかしある時、ユダヤ人の偽教師たちが現れ、イエスを信じるだけでなく旧約聖書の律法を守り、ユダヤの慣習を遵守しなければならないと人々に説き始めました。ユダヤ人信者も異邦人信者も、これらの問題について多くの疑問を抱えていました。

パウロはローマの信徒たちにこれらの問題について語るためにこの手紙を書いたのです。彼は律法の目的は罪を明らかにすることだと説明しました。しかし律法は救いを得る手段ではありません。ユダヤ人であれ異邦人であれ、私たちは信仰によって神の恵みのみによって救われるのです。聖書のすべての律法を守ることによって救いを得る者は誰一人いません。

また、非ユダヤ人も安息日を守らなければならないのか、コーシャー（ユダヤ教の戒律が許す）食品のみを食べるべきか、割礼を受けるべきかについても意見が分かれています。ユダヤ人クリスチャンも異邦人クリスチャンも、これらの問題について多くの疑問を抱えていました。「本当にすべての人は失われているのか」「どうすれば義と認められるのか」「救いの方について旧約と新約は一致しているのか」「これらの問題で異なる意見を持つ人々とはどう関わるべきか」「今日の教会とイスラエルの関係はどうなっているのか」

パウロはこれらの疑問に、読者に福音を明確かつ体系的に説明することで対処しました。彼の焦点は、キリストへの信仰による義に置かれていました。ローマ人への手紙の核心的な主題と執筆目的は、1 章 16-17 節に示されています：

¹⁶ 私は福音を恥じません。それは、信じるすべての人、まずユダヤ人、次に異邦人のための神の力だからです。¹⁷ 福音には、神の義が啓示されています。それは、初めから終わりまで信仰による義であり、聖書にこう記されているとおりです。「義人は信仰によって生きる。」

パウロは、私たちがキリストへの信仰によって救われ、キリストへの信仰によって生きることを、はっきりと示したかったのです。

手紙の冒頭と最後に、パウロはローマの信徒たちを訪ねたいと記しています。ローマへ赴き、やがて福音の宣教が行われていない国々や人々のもとへ行くことを望んでいました。彼はスペインで福音を宣べ伝えたいと語っています。

メッセージと要点

上述のように、ローマ書の中心的な焦点は、キリストへの信仰による義です。パウロは、ユダヤ人も異邦人も含め、すべての人間が罪を犯し神の裁きに直面していることを明確に示しています。キリスト以外には義なる者は一人もいません。律法を守ることによって義を得ることはできません。むしろ律法は、私たちがどれほど罪深い存在かを明らかにするのです。

私たちの罪深さにもかかわらず、神は恵みによってイエスを信じることを通して、私たちが義となる道を備えてくださいました。私たちの罪は、キリストの血による信仰によって完全に赦されます。私たちは信仰によって義と認められるのです。これは、イエスが私たちのために成し遂げてくださったことゆえに、神が法的に私たちを「無罪」と宣言されることを意味します。

キリストの血は過去の罪の問題を解決します。その血を通して、神は私たちを神の御前に義と見てくださいます。しかし別の問題、すなわち私たちの罪の性質（罪性）の問題があります。パウロは、イエスが流された血によって私たちが犯した罪の罰を処理し、また私たちを内側から義とすることで、信仰を通して私たちの罪性に対処してくださると説明しています。

私たちがイエスを信じる時、イエスと一つにされます。洗礼は、イエスの死と復活においてイエスと一つになることの象徴です。神は古い性質を改革しようとしているのではなく、キリストの死によってそれを殺そうとしているのです。神は私たちが古い罪の性質に死に、キリストにある新しい性質によって生きることを望んでおられます。私たちは律法を守ろうと努力することによってではなく、キリストが私たちの中に生きておられることを信頼することによって、義にかなった生き方ができるのです。私たちはキリストのいのちを受けることによって、キリストの義を受け取るのです。神は聖霊を私たちに与え、私たちの中に住まわせ、キリストへの信仰によって義にかなった勝利の生活を送れるようにしてくださったのです。

9-11章でパウロは、イスラエルと神、そして教会との関係について論じています。パウロはイスラエルを愛し、彼らがイエスを信じることで救われることを願っていました。異邦人はイエスを信じることで真の義を得ることができました。しかしユダヤ人は、自らの努力によって義となろうとしたため、真の義には至らなかったのです。彼らは信仰を持たずに自らの義を確立しようと努めたのです。ローマ人への手紙 9:30-32 はこの点をこのように要約しています：

³⁰ それでは、私たちは何を言えるでしょうか。義を追い求めなかった異邦人が、信仰による義を得たのです。³¹ しかし、義の律法を追い求めたイスラエルは、それを得ることができませんでした。³² なぜでしょうか。彼らは信仰によってではなく、あたかも行いによるかのように追い求めたからです。

パウロはユダヤ民族についての議論においても、信仰による救いを強調し続けました。彼は10章で「主の御名を呼ぶ者は、だれでも救われる」と記しています。これは難しいことではありません。自らの努力や行いによって義となるために、超人的な努力を必要とはしません。鍵は、ただ心で信じ、口でイエスが主であると告白することにあります。ユダヤ人であれ異邦人であれ、信じる者はすべて救われるのです。

今のところ、イスラエルは木から切り取られた枝のようにキリストから切り離されています。しかし、彼らがキリストを信じることを選ぶ時、最終的には再びキリストに接ぎ木されるのです。

12章から15章において、パウロはキリストの体と社会において共に義にかなった生活を送ることについて記しました。キリストの体はユダヤ人と異邦人の両方から成っています。私たちは互いに愛し合い、赦し合わなければなりません。体の各成員には霊的な賜物が与えられています。私たちは与えられた賜物を用いて信仰によって互いに仕えることで、他の成員を愛します。もしあなたが他者を愛するなら、あなたは律法の義の要求を満たしているのです。

愛とは、自分とは異なる考え方や習慣を持つ人々を受け入れることです。安息日を守り、特定の食物や偶像に捧げられた肉を食べない人もいました。パウロは、キリストの体の中では、そうした事柄について異なる見解を持つ人々を尊重し、受け入れ、愛さねばならないと教えました。

パウロは手紙の結びで、ローマを訪れ、さらにその先の地域で福音を伝える計画について述べています。最終章では、パウロはローマにいる少なくとも39人の兄弟姉妹に挨拶を記しています。

言葉と概念

パウロがこの手紙で展開する重要な言葉や概念がいくつかあります。これまで話ししてきたように、福音はローマ書の主題です。「福音」という言葉を何千回も耳にしてきたとはいえ、福音の意味とそれが私たちにどのように適用されるかをしっかりと理解する必要があります。福音は単なる非信者向けのものではなく、私たちの日々の神との歩みにおいて不可欠な部分なのです。

パウロが教えの中で説明し対比する重要な語句がローマ書には複数あります。これには福音と律法、義と不義、信仰と行い、恵みと律法主義、信頼と自慢、霊と肉が含まれます。これらの語句が重要な理由をいくつか例示しましょう。

パウロは「律法」という言葉をいくつかの異なる意味で用いています。時には十戒を指し、時には旧約聖書を、時にはモーセ五書（旧約聖書の最初の五巻）を指し、時には原則を指し、時には律法主義を指します。パウロが「律法」という言葉をどのように用いているかを理解することは、各箇所の意味を理解する上で極めて重要です。

「霊」と「肉」という言葉もまたもう一つの例です。パウロは「肉」という言葉を、人間の身体、人間そのもの、私たちの中にある罪の性質、そして善を行うための自分の能力や努力を指すために用います。パウロは「霊」という言葉を、人間の霊について語るために、また時には聖霊について語るために用います。

これらの言葉については学びの中で整理していきますが、パウロがこれらの言葉をどのように用いているかを理解することが、各箇所を正しく解釈するのに大変重要であることを指摘しておきたかったのです。

ローマ人への手紙の学び方

ローマの信徒へのパウロの手紙については、膨大な書籍がすでに書かれています。各章には掘り起こすべき貴重な真理が満ちています。しかし、パウロが記した真理の詳細さと深さに圧倒され、彼がすべての信徒に理解し体験してほしいと願った核心を見失いがちになるでしょう。どうかこのような事態を避けて、ローマ書の真理を知的に分析・理解するだけでなく、それがあなた自身に適用されることを信じてください。

パウロは 1:16-17 節で「神の義は信仰から信仰へと現される」と強調し、ハバクク書 2:4 の有名な言葉「義人は信仰によって生きる」を引用しました。ローマ書は信仰によって生きる書なのです！聖書に信仰をもって応答してください。膨大な教えや資料に惑わされたり複雑に考えたりしないでください。

これらの明快で単純な真理を、信仰によって自分のものとしてください！例えば 1 章から 8 章には、神がキリストにおいて私たちのために成し遂げられたことに関する多くの約束と説明が含まれています。そこに書かれていることが、キリストにあるあなたにも真実であると信じてください。

ローマ書のアウトラインを当ウェブサイトで公開します。ぜひダウンロードしてご覧ください。ローマの信徒へのパウロの手紙全体の流れを把握する助けとなるでしょう。

ローマ人への手紙のアウトライン

「義人は信仰によって生きる」

はじめに	1:1-17
ローマ書の中心テーマ：義人は信仰によって生きる	
第一部 人間は不義である	1:18-3:20
義人はひとりもいない。ひとりもいない！	
II. 信仰によって神の義の賜物を受ける（義認）	3:21-5:21
私たちは恵みにより、信仰を通して義と認められ（義とされ）、過去の罪の罰から解放される。	
III. 信仰による義の歩み（聖化）	6:1-8:39
私たちはキリストと一つとされ、私たちの内に住まわれる聖霊によって、罪の性質の力から解放されています。	
IV. 異邦人は信仰によって義とされたが、イスラエルはそうならなかった。	9:1-11:36
イスラエルは律法によって義を追い求めたが、それを得られなかった。異邦人は、信仰によって神の義を受け入れた。	
V. 日常生活において信仰によって義を实践せよ。	12:1-14:26
自分の体を生ける供え物として主にささげなさい。キリストのからだである教会の中で、共に日々の生活で義を实践しなさい。他の人を愛し、仕えなさい。	
VI. 信仰による義の福音のメッセージを分かち合う。	15:1-33
キリストの体として一致して福音を分かち合いなさい。パウロの目的は、福音を聞いたことのない異邦人に福音を伝えることでした。	
VII. パウロの結びの挨拶と指示	16:1-24